

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2025 年 9 月 20 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 アジアアフリカ地域研究研究科 アフリカ地域研究専攻

職 名・学 年 准教授

氏 名 阿毛香絵

助成の種類	令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	【和名】国際宗教学宗教史学会第 23 回世界大会(IAHR2025) 【英名】XXIII International Association for the History of Religions World Congress		
発表形式	☐ 招 待 ・ ☒ 口 頭 ・ ☐ ポスター ・ ☐ その他(		
発表題目	Sufi TV channels and Use of Digital Media in Senegal (パネル主催・座長:Religiosity, digital media and politics from below in Africa and in Asia)		
開催場所	ポーランド・クラクフ市(ヤギェウォ大学)		
渡航期間	2025 年 8 月 25 日 ～ 2025 年 9 月 1 日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ☐ 無 ☐ 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (括弧内に経費総額)	費 目	金額(円)
		航空運賃(関空ーワルシャワ)	216980
		現地移動費(ワルシャワークラクフ)	20000
		宿泊費	85000
		学会参加関係費	10538(76371)
		現地滞在費	17482(32000)
以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 助成をいただき、どうもありがとうございました。おかげで非常に有意義な成果報告、研究交流の機会を持つことができ、感謝しております。		

成果の概要

報告者 阿毛香絵（アジアアフリカ地域研究研究科）

本助成により、参加が可能となった「国際宗教学宗教史学会第 23 回世界大会 (IAHR2025)」を通じて、非常に有意義な研究交流と研究成果発表の機会をいただいた。国際宗教学宗教史学会は、五年に一度の開催学会であり、また前回は新型コロナウイルスの影響で開催が延期されたこともあり、十年ぶりの学会となり、特にヨーロッパ地域を中心として、アジアやアフリカを含む各地から様々な参加者が参加した。

報告者が座長を務めたセッション「Religiosity, digital media and politics from below in Africa and in Asia（宗教性、デジタルメディア、アフリカとアジアにおける下からの政治）」は、これまで共同研究を行ってきた日本の参加者を主な発表者としつつ、フランスの協力者など外部の研究者も入れ、アジアについては日本、ネパール、ベトナム、アフリカについてはセネガルと南スーダンの事例について、2つのセッションでそれぞれ発表を行い、討論を行った。

報告者の発表「Sufi TV channels and Use of Digital Media in Senegal（セネガルにおけるスーフィー教団のテレビチャンネルとデジタルメディアの活用）」においては、主に 2000 年代以降のセネガルの政治とイスラームとの関係を概観するとともに、都市の若い世代を中心に人気を集めたイスラームの導師によってテレビ局やメディアミックスといった多様な宗教メディアが発展していることについて報告した。また、デジタルを介した様々なコンテンツやその発信方法についても徐々に変化をしてきていることを事例を挙げて分析し、近年ではより双方向性のあるメディアを日常のコミュニケーションに利用したり、SNS を利用して実際の集まりを企画したりすることも増えたことを指摘した。

また、報告者の事例を含むパネルは発表者が 6 人と多かったため二日間に分けて行われたが、全体において、異なるアフリカ・アジアの宗教性とデジタル利用についてのディスカッションを行った。参加者からは様々な質問やコメントが寄せられ、活発な議論が行われた。主に以下の 3 点に着目したい。

（1）宗教団体や教団などグループを主体としたメディアやデジタル通信技術の活用は、主に団体の代表者や主催者側の一方公的な情報発信が主だっている場合が見られ、こうしたケースにおいては拡散される情報は①信者を対象とした情報共有や団結を高めたり、教えを広めたりする場合が多い（日本の天理教の事例：樫尾）一方で、②信者以外のより一般市民を対象としたコンテンツ（ニュース番組等、セネガルのスーフィーテレビ局の場合：阿毛）や、布教目的の番組、証言などを発信していることもある。また、特にイスラームの事例に関して、一方でより「ユニバーサルな」、あるいは原点回帰主義的な動きがある一方で、地域社会や現地の習慣の中に根差した独自のイスラームの文化的要素を認め、価値化する動きも同時に見られる。

(2) こうしたメディアと並行して、一部双方向性のコミュニケーションを可能にするメディアプラットフォームや SNS (WhatsApp、Instagram など) を利用し、信者同士がネットを介した草の根レベルでのやりとりをしていることも観察される。オンラインを介した若い信者同士の新たなネットワークづくりについては、日本のムスリム (野中) のように、マイノリティ宗教の第二世代の若い信者間においても、よく観察されることである。

(3) それぞれの個人がデジタルを利用する方法や、グループ、集団への帰属度合いなどは、主だった傾向がいくつかあるものの千差万別であり、宗教や宗派による違いの側面よりも、社会階層や文化背景に依拠することも多いようである。また、国や地域によっては、宗教に関わる報道や、国家権力との関わりの中から、信仰心や宗教的帰属に関する SNS 投稿等の発信が非常にポリティカルな文脈で利用されたり解釈されたりする場面も起こりうる (ネパールのジャーナリストの事例：丹羽)。

以上のことなど、学会を通して様々に議論した内容を新たに検証し、今後もこうした共同研究発表の場を生かし、議論の深化、研究成果の更なるアウトプットに繋げていきたいと考える。研究発表機会を下さった京都大学教育研究振興財団の皆様には、心より感謝申し上げたい。



(左) パネル発表者の集合写真 (右) 学会参加者と宗教研究、アフリカ研究に関する交流 (筆者撮影)

【口頭発表概要】

Round Tables / Closed Panels / Films details, XXIII World Congress of the International Association for the Study of Religions (IAHR) Round Table / Closed Panel / Film number 0179

Religiosity, digital media and politics from below in Africa and in Asia

1. Amo K. “Sufi TV channels and Use of Digital Media in Senegal”
2. Tobinai Y. “Catching WIFI and Connecting with the Community of God: Use of the Internet and SNS among University Students in South Sudan”
3. Nonaka Y. “New Generation of Muslims in Japan – Focusing on “Young Muslims” and their use of digital space”
4. Bourdeaux P. “Essay on Vietnamese digital religiosities : a connected history contribution”
5. Niwa M. “Various Uses of Digital Media in the Nepalese Christian Community”
6. Naoki K. “New Religions on the Web in Contemporary Japan: A Case Study of YouTube Channels”

成果の概要 / 阿毛香絵

本助成により、参加が可能となった「国際宗教学宗教史学会第 23 回世界大会 (IAHR2025)」を通じて、非常に有意義な研究交流と研究成果発表の機会をいただいた。国際宗教学宗教史学会は、五年に一度の開催学会であり、また前回は新型コロナウイルスの影響で開催が延期されたこともあり、十年ぶりの学会となり、特にヨーロッパ地域を中心として、アジアやアフリカを含む各地から様々な参加者が参加した。

報告者が座長を務めたセッション「Religiosity, digital media and politics from below in Africa and in Asia (宗教性、デジタルメディア、アフリカとアジアにおける下からの政治)」は、これまで共同研究を行ってきた日本の参加者を主な発表者としつつ、フランスの協力者など外部の研究者も入れ、アジアについては日本、ネパール、ベトナム、アフリカについてはセネガルと南スーダンの事例について、2つのセッションでそれぞれ発表を行い、討論を行った。

報告者の発表「Sufi TV channels and Use of Digital Media in Senegal (セネガルにおけるスーフィー教団のテレビチャンネルとデジタルメディアの活用)」においては、主に 2000 年代以降のセネガルの政治とイスラームとの関係を概観するとともに、都市の若い世代を中心に人気を集めたイスラームの導師によってテレビ局やメディアミックスといった多様な宗教メディアが発展していることについて報告した。また、デジタルを介した様々なコンテンツやその発信方法についても徐々に変化をしてきていることを事例を挙げて分析し、近年ではより双方向性のあるメディアを日常のコミュニケーションに利用したり、SNS を利用して実際の集まりを企画したりすることも増えたことを指摘した。

また、報告者の事例を含むパネルは発表者が 6 人と多かったため二日間に分けて行われたが、全体において、異なるアフリカ・アジアの宗教性とデジタル利用についてのディスカッションを行った。参加者からは様々な質問やコメントが寄せられ、活発な議論が行われた。主に以下の 3 点に着目したい。

(1) 宗教団体や教団などグループを主体としたメディアやデジタル通信技術の活用は、主に団体の代表者や主催者側の一方公的な情報発信が主だっている場合が見られ、こうしたケースにおいては拡散される情報は①信者を対象とした情報共有や団結を高めたり、教えを広めたりする場合が多い(日本の天理教の事例：樫尾)一方で、②信者以外のより一般市民を対象としたコンテンツ(ニュース番組等、セネガルのスーフィーテレビ局の場合：阿毛)や、布教目的の番組、証言などを発信していることもある。また、特にイスラームの事例に関して、一方でより「ユニバーサルな」、あるいは原点回帰主義的な動きがある一方で、地域社会や現地の習慣の中に根差した独自のイスラームの文化的要素を認め、価値化する動きも同時に見られる。

(2) こうしたメディアと並行して、一部双方向性のコミュニケーションを可能にするメディアプラットフォームや SNS (WhatsApp、Instagram など) を利用し、信者同士がネットを介した草の根レベルでのやりとりをしていることも観察される。オンラインを介した若い信者同士の新たなネットワークづくりについては、日本のムスリム (野中) のように、マイノリティ宗教の第二世代の若い信者間においても、よく観察されることである。

(3) それぞれの個人がデジタルを利用する方法や、グループ、集団への帰属度合いなどは、主だった傾向がいくつかあるものの千差万別であり、宗教や宗派による違いの側面よりも、社会階層や文化背景に依拠することも多いようである。また、国や地域によっては、宗教に関わる報道や、国家権力との関わりの中から、信仰心や宗教的帰属に関する SNS 投稿等の発信が非常にポリティカルな文脈で利用されたり解釈されたりする場面も起こりうる (ネパールのジャーナリストの事例：丹羽)。

以上のことなど、学会を通して様々に議論した内容を新たに検証し、今後もこうした共同研究発表の場を生かし、議論の深化、研究成果の更なるアウトプットに繋げていきたいと考える。研究発表機会を下さった京都大学教育研究振興財団の皆様には、心より感謝申し上げたい。



(左) パネル発表者の集合写真 (右) 学会参加者と宗教研究、アフリカ研究に関する交流 (筆者撮影)

【口頭発表概要】

Round Tables / Closed Panels / Films details, XXIII World Congress of the International Association for the Study of Religions (IAHR) Round Table / Closed Panel / Film number 0179

Religiosity, digital media and politics from below in Africa and in Asia

1. Amo K. "Sufi TV channels and Use of Digital Media in Senegal"
2. Tobinai Y. "Catching WIFI and Connecting with the Community of God: Use of the Internet and SNS among University Students in South Sudan"
3. Nonaka Y. "New Generation of Muslims in Japan – Focusing on "Young Muslims" and their use of digital space"
4. Bourdeaux P. "Essay on Vietnamese digital religiosities : a connected history contribution"
5. Niwa M. "Various Uses of Digital Media in the Nepalese Christian Community"
6. Naoki K. "New Religions on the Web in Contemporary Japan: A Case Study of YouTube Channels"